

氏名 中村 文(なかむら あや)

本論文は、平安時代最末期から鎌倉時代初頭にわたる時期、すなわち後白河院が院政を敷いていた時期に作歌活動を行った者たちの動向を精緻に解き明かしたものである。

従来、当該時期は和歌を愛好し歌会を繰返した前代の堀河・崇徳両院の時代と、後鳥羽院を中心とする新古今歌壇との狭間にあつて、王朝的文化は平家の権勢と経済力とを背景とする建春門院や高倉天皇の宮廷が担っていたとみなされてきた。また、この時期の歌壇を領導した藤原俊成の歌観が後進に多大な影響を与え、新古今時代の新風を招来するのに大きく貢献したために、俊成的な歌観に沿った詠作を創出しなかった和歌行事や歌人が見過ごされてきた観がある。しかし、本論文は、この時代の文化状況の全体像を偏らない視座から過不足なく把握するためには、当代歌壇を支えた後白河院近臣や地下歌人たちの和歌活動を広く視野に収めなければならないという問題意識のもとに、以下の諸論によって構成されている。

「後白河院周辺の廷臣たち」では、後白河院と政治的に密接な関係を持ち続けた、藤原隆信、藤原実定・同実家、平親宗、信西の子息たちの伝記が論じられ、彼らが地下・隠遁者との交流を持っていたこと、建春門院ら女院御所での歌会・逍遥などの風雅な催しに深く関与していたことを述べ、後白河院を当代文化から排除して考えるべきでないことを明らかにする。

「二条天皇とその周辺」では、従来、和歌史的な評価がほとんどなされてこなかった二条天皇内裏における和歌活動を採り上げる。父後白河院との確執がもたらした政治的な必然性から伝統的な雅事全般を主宰しようとした天皇の意図を捉えている。第七章「源有房」においては従来の和歌史では擲い上げられなかった傍流的な歌会の企画者としての重要性を指摘し、第八章「藤原長方」においては、有能な実務官僚として生きた人物の和歌活動を明らかにしている。

「建春門院北面歌合の詠者たち」では、<高倉朝文化圏>を代表する催しとして捉えられてきた当該歌会の出席者を検討し、歌林苑参加との相関性が認められることを指摘し、源季広をめぐって撰家司層の和歌活動の実態の解明を通して、その家が代を重ねることで<歌の家>へ変容すること等を明らかにする。

「南都歌壇」では、当該時期の東大寺・興福寺の僧の和歌活動を考察し、後白河院と密接な関係を持ち、京都の政界・歌界でも活躍した範玄を始めとする南都の僧侶による歌会の有り様を明らかにする。

「歌壇群像」では、地下官人や出家隠遁者層の和歌活動を採り上げている。とりわけ第十五章「歌が詠み出される場所」では、歌林苑を従来、文芸的な結社活動として捉えてきたが、その実態は、血縁や姻戚関係、あるいは職掌などを通してゆるやかに繋がりあう人々が、歌筵での同座を希求し、歌稿や典籍を貸借しあうなど、階層を超えて様々な形で結びつこうとしていた中から自然発生的に生じたものであり、必ずしも純粹に文芸的な空間として存在したわけではないこと、人々が集いあつての詠歌の場は和歌が特權的に先行して存在したのではなく、連歌や今様、蹴鞠など同列のレベルで混在する空間から、参会者の共通意志に促されて発生することもあったということを示している。こうした趨勢は他の場にも通有の性格であったことを論じている。

以上の観点から、新古今時代前夜の当該時期における歌壇の動向と個々の歌人の生涯とそれらの連関を跡付けることによって、当代の文化的状況を精緻に解明している。

なお、詠歌自体のより深い検討が要請されるであろうし、論者の提出した歌圏という用語が適切であるかどうか、さらに検討する余地があると思われるが、従来、曖昧に扱われることが多かった後白河院政期の和歌活動の実態を詳細に解明した点は高く評価される。本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)に十分値するとの結論に至った。